

---

# シークレットレッド

石里ゆえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シークレットレッド

### 【Nコード】

N6900Z

### 【作者名】

石里ゆえ

### 【あらすじ】

気持ちが折れそうなある夜、柏木悠は友人・萌のところへ転がり込んだ。

目の前にある萌の顔を見ているうちに彼女の唇に引き寄せられ……。世間体を気にする悠と、飄々と自由気ままに生きる萌の微妙に揺れる友情。

かしわきはるか  
柏木悠はタクシーを降りると、目と鼻の先にあるマンションのエントランスをくぐった。

入ってすぐ右手には管理人室とプレートが掛かった小窓があり、日中は眼鏡をかけた人の良さそうな初老の男性が座っているが、すでにカーテンは引かれ、ひっそりとしている。

つきあたりのエレベーターも、二機備わっているものの、今は片方しか階数表示のランプは点いていない。恐らく利用の少ない夜間は一機しか動かしていないのだろう。

悠がエレベーターのボタンを押そうとしたとき、ちょうど扉が開き、若い男が降りてきた。

すれ違いざま、とつさに顔を隠すように悠はその男に軽く会釈する。

後ろめたいことがあるとか、化粧が崩れているからとかさういう理由からではない。鏡を見るまでもなく、いかに自分がひどい顔をしているか、それを知っているからだった。

目的のフロアに着くと、ヒールの踵を響かせながら薄暗い廊下を進み、見慣れた表札のかかった部屋の前で足を止める。

それからインターホンに指をかけ、押した。が、数秒待ってみても返事はない。中の様子を窺<sup>うかが</sup>ってみても、物音一つしなかった。

もう眠ってしまったのだろうか？ ほんの少しためらってから、もう一度押してみる。

すると、ややあって、ドア越しに人が動く気配がした。悠はほつと肩を撫で下ろす。鍵の金属音が聞こえるのとほぼ同時にドアが開いた。

ドアの隙間から顔を覗<sup>のぞ</sup>かせた友人は花柄のパジャマ姿だった。風呂あがりなのだろう。ほとんど日焼けしていない白い頬は上気し、唇もやけに赤い。こめかみのあたりには薄っすらと玉のような汗が

浮かび、濡れそぼった艶やかな黒髪には白いタオルが掛けられている。

そんなふうに入が一日の疲れから解放され無防備になる時間帯に押しかけてきたのは、どうしようもなくつらくて行き場がない時、彼女のところしか逃げ込める場所がないからだ。そして、彼女がそれを黙認してくれることも知っているからだ。

悠が予想したとおり、小学校からの親友、高橋萌たかはしもえは嫌な顔ひとつせずに部屋へ上がることを許してくれた。

「こんな時間にごめん」

「いいよ、別に」

「あのさ、お水もらってもいい？」

フローリングの床に敷かれたカーペットに腰を下ろし、悠は一息つく。それから汲んでもらった水を一気に飲み干した。からからだった喉が潤う。

萌はといえば、そんな悠を見てはいるが、何も聞こうとはしない。それに甘え、悠も何も話さない。

それは二人の間では決して特別なことではなかった。

萌は優しいけれど、他人への興味は薄いのだと、悠は考えている。だから自ら他人を問ただい質すような真似はしないし、積極的に他人へ干渉することもない。もちろん、だからといって薄情というわけではないが、何事に関してても我関せずな部分があることは否めなかった。彼女をよく知らなければ、無関心で冷たい人だと思ってしまう人もいるかもしれない。

それが災いしてか、恋人も二十八歳になる今日までいなかったし、これからもあまり期待できそうにはなかった。直接本人の口から聞いたことはないが、キスの経験だつてないはずだ。友人と呼べる人間だつて、悠が知る限り、悠以外にはいない。彼女は彼女が作り上げたごく小さな狭い世界の中で呼吸し、存在しているのだ。

限られた人だけが入ることを許される、彼女だけの世界。そこに入れたことは、悠にとって誇りともいえた。

昔から絵を描くのが好きだった萌は、それが転じて今は雑誌の挿絵などを描く仕事をしている。最近では手描きだけでなく、コンピュータを使って描いたりもしているらしい。主なクライアントは出版社や広告代理店だが、依頼があればすべて受ける。それが彼女のスタンダード。本の装丁や、ホームページの画像、フリーイラスト集のイラストなど、結構幅広く手がけている。

仕事柄、自宅の1LDKの部屋にこもっていることがほとんどだが、もともと外出を好まないこともあり、本人曰くこの仕事に向いているとのことだった。実際、彼女が外出するのは、近所へ買物に出かける程度だ。ウインドウショッピングにも、映画にも、飲みにも行かない。クライアントとの打ち合わせも、最近ではメールで済ませることが多くなったと聞いている。悠がいなければ、平気で一ヶ月でも人と会わずに生活しているかもしれない。

友人とはいえ、悠には到底真似できない。

悠は一人きりで何かをするということが、どちらかといえば苦手なのだ。

思考がネガティブになるし、社会との繋がりを感じられなければ不安にもなる。寂しい人だと同情されるのも真つ平だった。たまにバーカウンターで一人でお酒を楽しめる女性はかっこいいと雑誌でもてはやされたりするが、悠にはそうは思えない。単に一緒に行く相手がいないだけではないかといつい勘ぐってしまう。

それに時には同僚や友人と飲んで騒ぎたいし、くだらない世間話だつてほしい。愚痴だつてこぼしたい。

恐らくは世間の大方の人がそうであるように、悠もそうだった。

人間は一人じゃ生きていけないだよ。

無駄だと分かりつつも、何度か萌に向かってしたり顔で唱えてみたことがある。けれど萌はきょとんとした顔つきで、「ハルがいるじゃない」と答えたのだった。ハルというのは悠の愛称だ。呆れてため息をつくふりをしたが、実はその答えに満足 いや、安堵に近いかもしれない している自分に気が付いていた。

萌に必要とされている人間が、世界中で自分ただ一人のような気がして、それが心を満たしたのだった。自分は萌以外の人間も必要としているのに、彼女には自分だけが必要としてもらいたい。頼ってもらいたい。心のどこかにそんな身勝手な、独占欲の塊かたまりのような自分が潜ひそむ。

しかし実際のところ、頼るのはいつも悠のほうだった。記憶している限り、ここ十年、萌の口から愚痴や泣き言が出たことはない。涙を見せられたことも、ずっと部屋にこもっていて人恋しくなつたなんてことも聞いたことがなかった。

萌には何かが欠落しているのかもしれない。時々、悠は思う。けれど、そんな彼女だから悠は好きだし、一緒にいて安心できた。何より自分たちは互いの欠落した部分を補い合える。そう信じていた。

彼女との関係において、友人という一つの括くりを越えているとしたら、この点だろう。

昔聞いたことがある話。男と女は互いに欠けている部分を埋め合うのだと。むろん、それは人体の構造上の話が大きく関係しているわけだが、萌とは心を埋め合える気がした。心だけなら女同士だつて埋め合える。むしろ男なんていらぬ。

そう思うようになったのは大人になってからのことだった。厳密に言えば、ある事件をきっかけに悠が男性を受け入れられなくなつてからだ。

それは今から五年ほど前のこと。

悠は当時憧れていた会社の先輩に強引に性的な関係を持たされた。恐らく、相手は悠が彼に好意を持っていることに気付いていたのだろう。残業後、食事に誘ってもらえた悠は馬鹿みたいに有頂天になつていた。

まだメイクは上手くなかったが、食事の後はきちんとルージユだつて引き直した。今になつて思えば、そんな悠の態度の一つ一つが

彼を誘っているように見えたのかもしれない。

送るからと言われ、タクシーに乗せられて連れて行かれたのは、繁華街の片隅にある安っぽいホテルだった。少しお酒に酔っていたせいもあって、腕を捕まれ、わりとあつという間に部屋へ押し込まられてしまった。部屋の内装もおせじにも品があるとは言えないものだった。

自分が置かれている状況を把握した悠は慌てて逃げようとした。けれど、そんなことが許されるはずもなく。

彼は嫌がる悠を力ずくでベッドへと投げ捨てると、起き上がる間も与えず全身で押し掛かってきた。抗つても無駄だった。

乱暴な所作と酒と口臭が混じった荒い息づかい。薄闇の中で安っぽいライトに反射して光るけだものじみた瞳。悠が憧れていた先輩の面影は何ひとつとしてなかった。普段の大人びた余裕のある仕草や優しさもなかった。

頼りがいのあつた広い背中が、悠を絶望へと閉じ込める障壁にか見えなかった。

それで、ジ・エンド。

彼の体温と感触に軽い吐き気をもよおしながら、神様と両親に向かって「ごめんなさい」と何度も心の中で繰り返した。どうしてかは分からない。ただ、申し訳なさと胸がいつぱいだつたのだ。

翌朝目が覚めたときには、すでに彼の姿はなかった。心身ともに疲労困憊ひろいんぱくしていて、起き上がる気力すらなかなか湧かず、その日は風邪を引いたと嘘をついて会社を休んだ。タクシーで家に帰るとすぐに風呂を沸かし、彼の感触のすべてを消し去ろうと何度も何度も石鹸で身体を洗った。おかげでボトルいっぱいに入っていたボディソープは半分にまで減ってしまった。それでもなかなか拭いきれず、最後は半ば諦めて風呂に浸かった。

その日の夜、携帯に彼からメールが送られてきた。そこには「昨日はごめん。今度また飲もう」と書かれている。

『ごめん』の後には平謝りするスーツ姿の男性の絵文字、『また

飲もう』の後にはビールの絵文字が入っていた。

ふいに悠の目に涙が滲み、視界が霞んだ。腹の底のほうから熱いものが込み上げ、手にしていた携帯を床に叩き付けた。その衝撃で無残にも携帯の一部が欠け、プラスチックの破片が床の上に散らばる。その姿はまるで悠の心のようにだった。彼への憧憬や思慕も、もちろん跡形もなく碎け散った。

悠はバッグに鍵と財布とハンカチだけを押し込むと、萌のマンションへと向かった。

突然の来訪にもかかわらず、萌は何も言わずに中へと招き入れてくれた。ちょうど今と同じように。

悠は泣きながら、時々うめくように彼への悪態をついた。ふざけるな。絵文字なんかクソくらえだ。きつと萌には意味が分からなかっただろう。

それでも萌は、泣きじゃくる悠の背中をずっとさすり続けてくれていた。その手が優しく温かくて。結局小一時間ほど泣いて、涙は枯れた。泣きたくても、もう何も目からは出てこなかった。

その時、涙は枯渇するものなのだという事を初めて知った。そしてそれ以来、男性とベッドを共にしていない。

「髪、ぼさぼさだよ。ハル。梳かしてあげようか？」

先に口を開いたのは、萌だった。言いながら、悠の髪に触れてくる。

悠は首を横に振った。

緊急避難的に萌のところへ転がり込んだのは、あれ以来だ。

月二回くらいのペースで彼女に会いにきているが、いつもはもつと穏やかに、ある程度は時間も考えて訪れている。ちゃんと二人分の手土産なんかも持参したりする。大抵はケーキかワインだ。

でも、今日はそんなことに頭を回している余裕はなく、着の身着のままだった。

そんな悠の背中に、萌の温かい手が添えられる。

風呂あがりと思われるその手は普段より熱がこもっているような気がした。

ふと、その熱に反応するように彼女を見ると、萌の真っ黒な瞳と視線がぶつかった。いつも思うのだけれど、萌の目は力強く、迷いが無い。そして突き抜けるかのように、どこまでも真っ直ぐだ。

その目でじつと見つめられると、時々どうしようもなく居心地悪く感じることもある。まさに今がそうだ。丸裸にされたうえ、心の裏側まで見透かされている。そんな気がして落ち着かない。彼女の視線を正面切って受け止めることができない。

いたたまれず、ほんの少し視線を外すと、彼女のまだ色付いたままの赤い唇が目飛び込んできた。

ふいに、ある衝動が悠を襲った。

目の前にある赤に口付けたい　そんな衝動。

そしてその衝動を抑えることなく、悠は萌との距離を縮めていく。そういえば、と悠は思う。先日見たテレビ番組で、人は赤いボタンが目のあるとそれを押さずにはいられないのだと言っていた。実際、被験者たちはそのボタンが何のボタンなのか確認もせず、それを押し、大変な目にあっていた。被験者の一人である芸人が水を被ると、会場は大爆笑となった。

それに確かアダムとイブの話もそうだ。赤い果実の誘惑に勝てず、その実を口にしてしまったのだという。

恐らく今、悠が感じている衝動は、それと同じことなのだ。言い訳がましく、自分に言い聞かせる。

そして、禁断の果実を口に含むように、萌の唇にそっと触れるかのように口付けた。初めて触れる彼女の唇は想像以上に柔らかく、温かい。

萌のほうはといえば、当然のことながら相当驚いているようで、抵抗の欠片かけらも見せず、ただその大きな瞳を一層大きく見開いているだけだった。彼女にとってはたぶんファーストキスだ。それを奪えたことに、ひそかに興奮している自分はおかしいのかもしれない。

けれどそんなことはどうでもよかった。目の前に赤いボタンがあれば、それを押す。それは太古の昔からの慣わしのようにすら思える。それほど自然な行為であると同時に、何かとても重大かつ神聖な行為でもあるような気がして、悠はますます興奮した。

しばらくすると、萌が苦しそうに悠の胸を叩いたので、唇を離してやった。彼女の目は少し赤らみ、涙ぐんでいて、焦点も失っている。それが悠を余計に煽る。次は。

考えたところで、何も思いつかなかった。当たり前だ。性体験といえば、レイプされた一回のみで、ましてや同性相手にどうこうしたことも、どうしようしようと考えたこともないのだ。完全なる知識不足だった。

仕方がないので、萌の首筋に唇を移動させてみることにした。昔見たトレンディドラマの真似事だ。ついでに決して豊満とは言えない彼女の胸をパジャマの上から揉んでみた。修学旅行や温泉で何度も見たことのある胸だ。昔から慎ましかだったそこは、成長してもそのままだった。もっとも悠も人のことを言える立場にはないのだけれど。

胸を揉まれ、そこでようやく我に返った萌が反応を見せた。

悠の手を押し退けながら、少しも艶のない声で笑ったのだ。「くすぐりたい」と身をよじり、目尻に薄っすらと涙を浮かべながら笑い続ける萌につられ、悠も思わず吹き出してしまった。まったく色気がなさすぎる。修学旅行でまくら投げでもしている気分だ。

「もうギブするから、よしてー」

ひーひーと苦しげな息の合間から懇願され、悠はようやく萌から離れた。

「萌ってば笑いすぎ。ほんとくすぐったがりなんだから」

口を尖らせながら、本当は少しほつとしていた。萌が笑い飛ばしてくれたから、キスは特別な意味を持たずに済んだのだ。ただのじやれ合い。友達同士のちょっとしたふざけたスキンシップ。それで終わることができた。

もし、彼女が笑い飛ばしてくれなかったら？

考えると背筋が凍るような気がした。

本気で嫌がられたり拒否される可能性は十分あったし、逆に本気で応えられていたらそれはそれで問題があった。萌のことは好きだが、恋愛対象として見ているわけではない。キスしたのだって、ただそこに萌がいて、彼女の唇が赤かったからなのだ。たぶん。

いずれにしても微妙な空気が流れたに違いなかった。

「でも、よかった」

ひとしきり笑った萌の眩きに、悠は驚いて彼女へ目を向ける。キスのことを言っていると思っただのだ。しかし、彼女が続けた言葉でそうでないことはすぐに分かった。

「ハルさ、さつきまで酷い顔してたから。笑ってくれてよかったよ」  
「あ、うん。ありがとう」

自分の思い違いを恥じ、それを隠すように早口で答える。

確かに荒くれ立っていたはずの心はまるで波が引いたかのように穏やかさを取り戻していた。

「なんか暴れたら喉渴いたね。ワインあるけど飲む？ それともビールにしとく？」

萌はよいしょと腰を上げて、冷蔵庫の中を物色している。

「赤？ 白？」

「どっちもあるよ。悠は赤がいいでしょ？」

「うん。ねえ、お腹も空いちちゃった」

「じゃあ、チーズと、冷凍ピザでも温めようか」

萌は冷凍ピザをオーブントースターに放り込んでから、高級そうな赤ワインのボトルを左脇に抱え、ワイングラスとチーズを持って悠の隣に腰を下ろした。

悠がワインラベルに目を向けていることに気付いたのが、「貰い物だよ」と言って笑った。

キャビネットからワインオープナーを取り出し、器用な手付きでコルクを抜く。悠はこの作業が苦手だったが、もともと器用な彼女

はいとも簡単にやってのける。ワインをグラスに注ぐと、鮮やかな赤が目眩しかった。

そのうちにオープントースターがちゃんと高らかな音を立て、二人で焼きたてのピザをはふはふと言いながら食べた。明日には覚えていないような他愛もない会話を交わしながら、ワインを継ぎ足す。

女ともだちとワインとピザがあれば、世の中どうとでもなるような気がしてくるから不思議だった。少し安直すぎるだろうか？ それとも世の女性たちも、皆こうして、怒りや不安をやり過ごしているのだろうか？

ワインを一本空け終わる頃には、お酒にあまり強くない萌の目はとろんと蕩けそつで、呂律もいよいよ怪しくなってきた。頬も風呂あがりのそれとは違う赤さははらんでいる。

「萌、大丈夫？ 水持ってこようか」

悠が腰を上げようとした時、

「……ハルはさ、前もそうだったけど、何も言わないじゃない？ ぜんぶ自分の中に溜めて溜めてさ」

「え？」

「そういうのってきつとキツイんだと思う。だからさ、耐えられなくなったら、私を壺だと思ってくれていいんだからね？」

萌がこんなことを言い出すのは初めてだった。

悠は、彼女を『何も聞かない人』だと思っていたが、どうやら相手は自分を『何も言わない人』だと思っていたらしい。長く一緒にいても分かり合えないこともある。人とはなかなかどうして厄介な存在だ。

「壺？」

「うん。壺。知らない？ 王様の耳はロバの耳って。誰にも言っちゃいけないことを、一人で抱え込めなくて壺に顔を突っ込んで言っただっていう話」

「聞いたことあるかも。でもそれって確か井戸じゃなかった？」

それに、あの話は確か叫んだ秘密がただ漏れしてしまったはずだ。

指摘すると、「そうだったか？」と萌は首をひねったが、「とにかくね。誰にも言えないことでも、私を壺だと思って話したっていいんだよって。そういうこと。前はさ、ちゃんとそう言ってあげられなかったから」

萌はそう言っつて、冷めて固くなったピザの最後のひとかけを口へ放り込んだ。

「そっか……」

肝心なことは何も言わず、自分の中に溜め込むのは悠の性分で、物心ついた頃からそうだった。それが当たり前になっていて、彼女がそのことをとても心配していることなど気付きもしなかった。

きつと、話すべきなのだろう。

悠は、ここへ来るまでのことを思い出していた。

悠には実は今、付き合っている人がいる。

そして、今から数時間前、悠はその彼と会っていた。

出会ったのは、ちょうど一年前の同じ日。彼の誕生パーティーに誘われて参加したのがきっかけだ。面識のない人のパーティーに参加するのも気が引けて断ろうとしたのだが、急に来れなくなった人がいるからと同僚に頼み込まれたのだった。

彼は気さくで、初対面の悠にも優しく接してくれた。何となく意気投合し、互いの友人も交え、何度か一緒に飲みに行った。そのうちに、彼からデートに誘われた。

初めのうちは過去のトラウマから断っていたのだが、最後は「友達からでもいいから」という彼の言葉に頷いた。いつまでも過去の痛みに捉われているわけにはいかないし、自ら一步を踏み出さなければ、どこへも行けない。だから彼と付き合うことにした。

彼とは映画や音楽の趣味も、食べ物の嗜好も、思考のロジックもわりと似ていて、ほとんど喧嘩もなく、付き合いは順調だった。

ただ、どうしても彼と身体の関係を持つことができなかった。二度ほどそういう雰囲気になったことがあったがうまくいかず、以来

彼からは何も求めようとはしなくなった。レイプされたことは話していないが、勘の良い人だからきつと何か察していたのだろう。

彼に我慢を強いていることに、悠はいつも後ろめたさを感じていた。男性の性欲というものが、自分と違うことを知っているからなおさらだ。それに彼がそのことで悠を責めようとしなないことも妙なプレッシャーとなっていた。

何度か「他で寝てきていいよ」と言おうと思った。けれど、果たしてそれを口にすることが正しいことなのかどうか分からず、結局言わなかった。多分プライドもあったのだと思う。自分が彼の性欲を処理してあげられなくても、それを他の女で賄まかなわれるのは嫌だったから。

このままではいけない。

悠は、出会って一年目となる彼のバースデーに賭けることにした。それが、ちょうど今日　いや、すでに日付が変わっているから昨日のことだ。

その日こそ彼と一つになろうと心を決め、レース付きのランジェリーを新調し、日々頭の中でイメージトレーニングを繰り返した。時折、おぞましい記憶がまざまざと蘇り、過呼吸に陥ったが、それでも悠の決心は揺るがなかった。

銀座にある洒落たフレンチレストランでディナーを共にした後、あらかじめ予約しておいたホテルへ彼をさりげなく誘った。心臓は壊れる寸前の如く、早鐘を打ち続けていた。

気分を落ち着かせるために、テーブルの上に置かれたシャンパンに手を付けた。予約した時に頼んでおいたものだ。

互いに二杯ずつグラスを空にしたところで、悠のほうから彼にキスした。むろん、萌にしたように衝動に身を任せてのことではない。気が変わらないうちに、さっさと終わらせてしまいたかったのだ。

彼はそんな悠の気持ちに気つく様子もなく、とても嬉しそうに応じてきた。彼からしてみれば、ようやく恋人に受け入れられようとしているのだ。当然といえば当然の反応なのかもしれない。

優しく髪を撫でてくれる彼の手に、少しずつ悠の緊張もほどけていく。良い兆候だった。

しかし、男性の匂いのする広い胸に抱きしめられ、その大きな手で前開きのシャツワンピースのボタンを外されたとき、突如として抗いがたい嫌悪感と共に吐き気に襲われた。

たまらず悠は彼を突き飛ばして、トイレへと駆け込み、ダイナーで食べたものを全部吐き出した。海老や蟹、大好きな牛フィレ肉もだ。最後のほうは吐くものがなくて、胃液だけが搾り出された。あまりの苦しさに目には涙が滲んだ。彼が背中をさすってくれたが、苦痛が緩和することはなく、その手すら振り解きたい衝動を必死に抑えた。

悠は自分が分からなくなった。

果たして、自分は本当に彼を好きなのだろうか？ 心の中に芽生えた小さな疑問。本当は彼を好きなのではなく、好きになりたかっただけではないのか。

彼と付き合い始めたのは過去との決別のためだった。彼は優しく、息も合ったから、もう一度恋を試してみる相手としては申し分ないと思った。そして、もう一度恋ができさえすれば、過去の傷を乗り越えられると信じていた。

表面上はうまくいっていた。彼を好きになれたと思っていた。しかしそれはすべて幻想ではなかったか。もしも本当に愛していたのなら、こんなことになるはずがないのだ。

本来であれば彼と身体の関係を結べないと気付いた時点で別れるべきだったのに、足掻く<sup>あが</sup>ように、彼にしがみついていた。その結果がこれだ。

萌とは違い、他人の目や社会の評価を極端に気にする悠にとって、あの事件は一刻も早く忘れて、恋人を作って結婚する必要があった。行き遅れになることは避けねばならなかった。それにひとりぼっちになることが恐かった。だから、彼というチャンスを手放すことができなかった。

だとしたら、自分はなんて弱く、身勝手に酷い人間なのだろう。あらゆる思いが押し寄せ、流されそうだった。

そして気付いたときには、ワンピースの前を押さえ、バッグを小脇に抱えて、ホテルから飛び出していた。向かう先は、当然、萌のところだ。

部屋を出て行く時、ほんの一瞬、彼の姿が視界の隅に映った。顔は青褪め、視線はぼんやりと床に落とされている。彼を傷付けてしまったのだと思った。そしてそれは、悠の胸を痛いほどに締め上げたのだった。

「ねえ。本当に壺だと思って話してもいいの？」

悠は萌を見た。

「うん」

「長いし、つまんないよ？ 寝物語にもならないし」

「いいよ。聞くだけならいくらでも聞く。壺だから助言はしないけど」

悠は大きく息を吸ってすべて吐き出してから、自分がこれまで溜め込み続けたことを順を追って話し始めた。

憧れの人に無理矢理身体の関係を持たされたこと。それ以来、男性を受け入れられなくなったこと。ようやく新たな恋を始めたはずだったのに、実は違ったこと。彼をひどく傷付けてしまったこと。

萌は肯定も否定も挟まず、時折小さな相槌を打ちながら、腕を組んでじつと話に耳を傾けていた。言葉が途中で途切れても、静かに続きを待ってくれていた。

話しているうちに、不思議と自分の中で苦しかった現実が浄化されていくような気がした。抱えすぎた重たい荷物を一つ一つ下ろしている。そう実感することができた。

話しながら悠は萌に話せてよかったと思った。

以前、誰かにすべてぶちまけてしまいたくて、カウンセリングへ行こうと思ったことがある。しかし結局思い切ることができず、行

かずじまいだったのだが、今となつてはあの時行かなくてよかったとつくづく思う。カウンセラーというのは専門家なのだろうが、どうせ自分の秘密を明かすのなら、赤の他人である専門家なんかより萌のほうがずっといい。

やがて夜は明け、小鳥のさえずりと共に白く輝く朝日が差し込み、天井や壁を明るく照らし出した。話し終えるのに一晩かかったのだ。

「ね？ 長かったでしょ？」

悠はすつきりした面持ちで両腕を上を持ち上げ、思い切り伸びをした。徹夜したのは久しぶりのことだったが、身も心も羽のように軽やかで、眠気や疲労は一切ない。

「まあ、ね」

比べて萌は少し眠そうに見えた。目を擦り、大きな欠伸を噛み殺している。

「はは。萌つてば眠そう。ねえ、その……ありがとう」

「うん。それよりシャワー浴びて、顔洗っておいで。すつきりするよ。朝ごはん、用意しておくから」

悠はタオルを借りて、有難くシャワーを使わせてもらうことにした。メイクをしたまま一晩明かしたせいで顔の脂浮きが激しかった。放っておけば吹き出物になりかねない。頭からシャワーを浴び、顔のクレンジングを入念に行う。

萌と一緒に暮らせたらしいのに。

洗い上がった髪を拭きながら、ふとそんなことを考えた。

毎日一緒にごはんを食べて、おしゃべりをして、キスをして眠る。ベッドルームは別々でもいいけれど、時々枕を並べて眠る。もちろん、くすぐりっこも不可欠だ。萌の仕事場は自宅だから、悠は彼女に見送られて出勤する。そして帰ってくると萌が出迎えてくれる。ワインを飲みながら、お気に入りのDVDを見るのもいい。

とりとめもなく想像すればするほど、それはとても楽しそうで、悪くない気がした。

萌に話したら、彼女はどんな反応をするだろう？

普通に「いいよ」と言ってくれそうな気もするし、必要以上のパーソナルスペースへの侵入に難色を示しそうな気もする。いずれにしても彼女は自分の頭で考え、そして判断するだろう。そこに他人は介入しない。彼女はそういう人だ。

しかし、悠は違う。最初は楽しくても、やがて他人の目が気になり始めることは火を見るより明らかだった。腹が立つくらい自分のことがよく分かる。何事につけても、規定値から外れられない自分。それは決して自分の意思ではない。常に自分以外の誰かを気にしているだけだった。それが誰かさえ分かりやしないのに。

悠はゆるゆると首を横に振り、くだらない妄想と底が見えないほど深い自己嫌悪を頭から追い払った。

シャワーを浴びている間に、居間のテーブルには朝食が並べられていた。トーストとサラダ、それにゆで卵にコーヒーだ。

「うわあ、美味しそう」

普段はコンビニでおにぎりかヨーグルトを買ってオフィスで食べている悠にはちょっととした感動だった。

「大したもの作ってないけどね。さ、早く食べよう」

「うん。食べる食べる。そういえば萌は昔っからゆで卵好きだったよね。味付け玉子とかも」

「そうだったっけ？」

悠はゆで卵の殻を剥き、塩と胡椒を軽く振ってかぶりついた。萌は黙々とトーストにバターを塗っている。

「あのね。萌」

「うん？」

「今日、彼に会ってくる。それで、とりあえずは昨日のこと謝ってくる。それから……ちゃんとけじめつけてくるから」

悠は決意を固めるように口にした。妄想や空想することは楽しい。それを現実にできたらどれほどいいかとも思う。でもそれが無理ならば、今自分にできることを考えて、実行するしかない。そしてそ

れはまず彼に謝罪し、自分なりのけじめをつけることだった。

「うん。そうだね。それがいいと思うよ」

萌の賛同は、何にも代えがたく悠の決意を後押ししたのだった。

彼との待ち合わせは、デートでよく利用した有楽町の喫茶店にした。

コーヒーとワッフルが自慢の店だ。彼は店内に漂う甘い香りが苦手だと言っていたが、ガラス張りの店内には天気の良い日はさらさらと陽が注ぎ、開放感があつて悠は気に入っていた。

悠が店に入ると、彼は先にテーブルに着いていた。彼の前に置かれたコーヒーカップからは湯気が立ち消えていたが、あえて気付かぬふりをした。

「その、来てくれてありがとう」

彼に連絡をとったのは、萌が作ってくれた朝食を食べ終えた後だった。突然の呼び出しに応じてくれたことに礼を述べる。

「いいよ、別に。暇だったし」

彼は手を上げてウェイターを呼び、コーヒーのおかわりと、悠の好きなカフェラテを注文した。注文した品が運ばれるまで互いに一言も口を聞かなかった。彼は壁にかかった絵を眺め、悠は窓の外を行き交う人々を見ていた。

注文した品がテーブルに並べられ、ウェイターの姿が見えなくなる。

「その、昨日はごめんなさい」

悠は素直に頭を下げた。

「別に。それより身体のほうは大丈夫なのか？」

彼は悠の謝罪を受け流し、どこか不貞腐れたような口調で悠の体調を聞いてきた。昨日は突然吐いたから、具合が悪いと思ったのだろつ。

「うん。大丈夫。ありがとう」

「そう。それで話して？」

悠は謝るためだけに彼を呼び出したわけではなかった。

すべてにけじめをつけるために、ここまで来てもらったのだ。なのに、彼のほうから本題に迫られ、心臓がどきりとした。緊張のせいで膝の上で握り締めた拳が震えるのを止められない。

「私、祐一に話さなきゃいけないことがあって」

「うん」

「あのね。私たち、付き合うべきじゃなかったんだと思うの。祐一には私なんかより良い人がきつといたと思うし。今からでも遅くないとも思う。だから……」

悠は視線をカップに落としたまま、切り出した。何と言おうか散々悩んだ末の台詞だったが、口にしてからもっと気の利いた言葉はなかったのだろうかと後悔した。

彼はコーヒを飲み、ゆっくりとした動作でカップをソーサーに戻してから、呆れるような長いため息をもらした。

「……意味、分からないんだけど。つまり俺と別れたいって、そういうこと？」

悠はそれに対して、背を丸め、さらに深くうなだれる。

「私ね。昔、男の人と嫌なことがあって、それ以来男の人がダメなの。苦手なの。祐一だって気付いてたんでしょう？ だからこれ以上、もう無理なの」

目をぎゅっと瞑り、膝の上の拳を震わせながら、「もう無理なの」と繰り返した。

「それで。それで君はどうしたいの？」

「え？」

問われたことの意味を理解できず、悠は顔を上げて目の前の彼を見た。しかし、彼の表情から言葉の意味を推察することはできなかった。

「だから。君は俺と別れて、それからどうするつもりなの？」

言葉の端々《はしはし》に苛立ちを感じる。彼がこんな態度を悠に対して取るのは初めてのことだった。

悠としては、どうするつもりも、こうするつもりもなく、ただ彼のいない生活に戻るだけのつもりでいた。彼と会っていた時間を趣味に使ったり、萌と遊んだりする。しかしなぜかそれを口にすることはできなかつた。すると畳み掛けるように、

「カミングアウトでもする？」

「何よ、それ」

彼の言い草に腹の底がかつと熱くなつた。

カミングアウトという言葉が、隠された性的嗜好などを公にするという意味があることくらい知っている。悠は別に彼と別れて、同性愛者になると言っているわけではないのだ。ただこれ以上、彼と一緒にいられない。そう思ったから、別れる決心をしたのだ。それなのに彼はいつも簡単に俗な言葉で悠を追い詰めようとする。

「じゃあ、いつそのこと世界中まわって女だけの部族でも探してみるか？ ほら伝説のあれ。なんだっけ？ ああ、アマゾネスだ。でもダメか。あれは女で群れをなしてるけど、子孫を残すために男と交わるからな」

彼が悠を皮肉っていることは痛いほど分かつた。もともとこんなことを言う人ではないのだ。それは分かつている。しかし腹の底で生まれた熱がどんどん膨らみを増していくのは止めようがなかつた。「やめてよ。そういう品のない言い方。ひどいよ」

感情を圧殺し、静かに抗議を唱える。

「ひどい？」

「ひどいよ。あんまりだよ。私、そういうこと言ってるんじゃないの」

「じゃあ、どういうことだよ？ 君は男が苦手だから、今さら俺と別れると言ってる。それが本当なら次の男なんて探せるわけがないなら一生ひとりで寂しく生きていくか、レズビアンとして生きていくかしかないじゃないか」

言われて、反論しようとしたが言葉が出てこなかつた。仕方なく唇をぎゅっと噛み締める。

「ほら、何も言い返せないんじゃないか。正直、俺は君に対して怒ってる。でもそれは昨日のこととは関係ない。俺が腹が立つのは、君が俺と一緒に乗り越えようとしなくていいことだ。その努力さえしようとしなくていいことだ。全部ひとりで勝手に諦めてることだ。分かるか？」

「あんにんに……あんにんに何が分かるのよ……」

悠の目からぽろりと涙が落ちた。

彼の言うことは多分正しい。仮にも恋人なのだから、共にあらゆる障害を乗り越えていくのが本当なのだろう。しかし、悠は彼に何も話さず、ずっと自分の内に閉じ込め続けてきた。理解も救いも求めず、相手に手を差し伸べるチャンスさえ与えず、一方的に彼を断ち切ろうとしている。彼が怒るのも無理はない。でも、でも、でも、そもそも悪いのは女を傷付けるのはあんなに男じゃないか。

悠は心の中で叫ぶ。それが八つ当たりだということとは重々承知していた。無関係な彼に責任転嫁すべきでないことも分かっている。悠は無体を強いた先輩と、今日の前にいる彼は別の人間なのだ。実際、彼は先輩とは違い、悠を気遣い優しく接してくれた。『男』という性別だけで一緒くたにするのは間違っている。

なのに、悠の目には、彼らが重なって見える。それは涙で視界が歪んでいるせいなのだろうか？

「悠？」

「あんなんかに……あんなにたちなんかに私の何が分かるって言うのよ！」

悠は思わず声を荒げた。穏やかな店内が一瞬にして緊張に包まれる。

周囲の視線が一齐に悠に向けられたが、もはやそんなことはどうでもよかった。

悠の言葉は、彼と、彼に重なる先輩と、世のすべての男たちへと向けられたものだった。それが理不尽なことであろうとどうであろうと関係ない。悪いのはあんなにたちだ。その思いだけが胸の中に渦

巻いている。

「悠、おい、落ち着けよ。何言って……」

「もう、いい」

テーブルの上の伝票を鷲づかみにして、レジへと向かった。本当は彼の二杯分のコーヒー代まで支払いたくはなかったが、分けて会計してもらうのも面倒だったのでまとめて支払った。男性店員がもたもとレジを打ち、釣銭を用意している間に、「お釣りはいらないから」と言っただけでさっさと店を後にした。

追いかけてきて謝ってくるか、あるいは自分のコーヒー代くらい渡しにくるかと思っただけ、時々後ろをちらちらと振り返ったが、彼の姿が見えることはなかった。

もやもやとした気持ちのまま、萌のマンションへ戻った。

道すがら、萌に彼の悪口を言いまくろうと心に決めていた。人の気も知らず、皮肉めいた言葉で自分を傷付けたのだと。そもそも男性が苦手。レスビアンとしか考えられないなんて短絡的にもほどがある。

一刻も早く話を聞いて欲しくて、悠は足を速めたのだった。

それなのに、玄関先で萌の顔を一目見たとたん、言おうと決めていた言葉の数々はどこかへと吹き飛び、悠は無言のまま彼女に抱きついた。

それから張り詰めていた糸が切れたかのように、わんわんと子供のように大きな声を出して泣いた。後から後から涙が溢れてくる。

やがて萌の両腕が悠の背へと回され、彼女の掌がゆっくりと背を上下した。それがやけに心地良い。

「あんなヤツ、大嫌い」

散々泣き散らした後、悠はようやく絞り出すように言った。

「うん」

萌は小さな声で相槌を打つ。

「ホント、最低なんだよ」

「うん」

「……でも一番サイテーなのは私なの」

責める筋合いのない相手を責めてしまったことへの後悔が胸に押し寄せる。いくら嫌なことを言われたからとはいえ、あんな風に思うべきではなかったのだ。あんなたちなんて、彼が知りもしない人と一緒くたにするべきではなかったのだ。別れ話とはいえ、もつとちゃんと向き合って話し合うべきだったのだ。

「バカだね、私」

「そんなことないよ。ハルはバカなんかじゃない」

萌の声が優しく、せつかく止まった涙がまた溢れ出しそうになる。普段、悠の意見に反対することがほとんどないだけに、肝心なところで「そんなことない」と言ってくれたことが余計に嬉しかった。

もつと甘えてみたくなり、

「……ねえ、キスしてもいい？」

「いいよ」

意外なほど、すんなりと萌は頷く。

悠は、昨夜は衝動にかられ触れてしまった彼女の唇を見つめた。しかし、不思議なことに、悠はもうそれに惹き付けられはしなかった。赤いボタンへの執着や渴望は一度きりのものなのだろうか？

唇を重ね合わせてみても、昨夜のような高揚感が襲ってくることもなく、どこか間の抜けたようなキスになってしまい、やけに気恥ずかしい気持ちになった。

「萌は好きな人いる？」

唇を離れた後、ぼつりと小声で訊ねた。長い付き合いだということに、正面切って聞いたのは初めてかもしれない。

「いないよ」

「もしかして男嫌いななの？」

「違うよ。他人に興味が持てないだけ」

「私は？」

怖々と、けれど期待を込めて聞いてみる。

「ハルのことは大好きだよ。でなきゃ、キスなんてさせないし、こんな風に甘やかしたりもしない」

悠はほっと安堵の息を漏らす。キスや身体の触れ合いで興奮を得られなくても、彼女の特別でありたいという気持ちは悠の中に健在しているのだ。ずっと彼女の小さな世界の住人でありたい。その気持ちに嘘はない。

「それなら」

「うん？」

「それならさ、一緒に暮らそう？　ずっと一緒にいよう？」

今朝がた想像していたシーンを思い描きながら、思い切って口にしてみた。不自然なほど心臓がばくばくと脈打っている。まるでプロポーズでもしている気分だった。

しかし、

「それはダメ」

思わず拍子抜けしてしまうほど、萌はあっさりとその提案を切り捨てた。

「はは。厳しいなあ。萌は」

「厳しいんじゃないよ。私はね。ハルには幸せになってもらいたいの。私はハルが傍にいてくれるのなら嬉しいし、幸せだよ。でも、ハルはそれじゃだめ。私にはハルを幸せにはしてあげられない」

「どうして？」

「どうしてって。分かってるんでしょう？」

萌はひとつ小さく息を吐いてから、優しくなだめるような口調でそう言った。しかしその声の裏に潜む寂しさまでは隠し切れていなかった。

萌がその提案に首を縦に振らなかったのは、きっと彼女の本心ではない。恐らくは、他でもない悠のためを思っていることなのだ。

二人でいれば楽しい。けれど二人でいてもどこへも行けない。友情から先に見い出せるものがあるかどうかすらも分からない。家族

を作ること、経済的、社会的な安定を得ることもできない。結婚のように法律に守られた約束を交わすこともできない。

萌はともかく、悠がそれに耐えられるわけがなかった。足元が覚束ないような不安定な関係と生活に心労を募らせ、そう遠くない未来に後悔する。そして苦しむ。

それが分かっているからこそ、萌はあえてその首を横に振り、ノと言ったのだ。誰よりも悠を理解し、考えてくれているからこそだった。

突然、悠の携帯電話が鳴り始めた。何の変哲もない普通の着信音だ。しかし、直感で彼からだろうと思った。そして萌もまた同じことを考えたらしい。

「ハル、電話」

「うん」

返事はするものの、身動きがとれない。

声を聞くのが怖かったし、何を話せばいいかも分からない。それにあんなふうに理不尽に怒鳴ってしまった手前、ばつも悪かった。

けれど、今出なければ、本当に彼とは終わりのような気がした。

そしてこの胸を圧迫するような後悔は生涯消えることはないだろう。

このまま終わってしまった方がいいのだろうか？ もう一度、しっかりと向き合ってみるべきではないのだろうか？

たとえ本当に別れるにしても、このままでは何とも後味が悪い。

それに悠はまだ何も乗り越えてはいないのだ。

悠は心の中で迷い、葛藤する。

萌はそんな悠の両肩を掴むと、ゆっくりとその身体を引き離れた。

「出たほうがいいよ。もしかた嫌なことを言われたら、いくらでも愚痴聞いてあげるから。ううん。なんだったら電話代わって文句言っただけ。だから、ほら」

そう言って萌は、携帯の入ったバッグを素早くたぐり寄せると、悠へと押し付けた。押し付けられたバッグを胸に、

ああ。萌は私が好きなんだ。

あまりにも唐突に気付いてしまった。

そしてそれを頭の中でゆっくりと反芻はんすうしてみれば、実感として全身を駆けめぐる。どうして今まで気付かなかったのか。そんなことは考えても仕方のないことだ。

それでも、あえて何も気付かぬふりをして、震える手で依然鳴り続ける携帯を取り出した。

気付いては、だめだ。そう自分に言い聞かせる。それは彼女の秘密として、彼女がずっと抱えていくべきものなのだ。

少なくとも、萌は悠がそれに気付くことを望んではない。彼女が望んでいるのは、今、この電話に出ること。それだけのはずだ。

彼女の気持ちに後押しされるかのように、携帯のフラップを開けると、着信表示は思ったとおり彼の名前だった。

「もしもし」

悠は不意に襲ってきた涙をこらえ、通話ボタンを押した。

(後書き)

小説公募への初投稿作品です。(一次選考落ち)  
多少、加筆修正しています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6900z/>

---

シークレットレッド

2011年12月23日02時01分発行